

2013.2.20撮影

フェール水面

せおと

フル水面

日 時 平成25年 **3** 月 **3** 日（日）午前9時30分～11時30分
場 所 鰺沢中部小学校 **体育館**
参加費 **無料** （持ち物 室内用運動靴）



- 1 分間じゃんけん … 1 人 5 枚のカードを持ち、勝ったら、カードをもらう。最後に一番多い人が勝ち。

- ・足踏み日本一 … 30秒間で足踏みがどれだけできるか。
- ・1分間ドリブル … 1分間に何回ドリブルができるか。
- ・豆つまみ皿うつし … 大豆を1分間で何個、皿に移せるか。
- ・洗面器お手玉投げ … 得点の表示がされた洗面器にお手玉が何個入るか。



NHK イベントコマーシャルに出演してPRしました
中澤圭吾アナウンサーと記念撮影

来てください～い

申し込みは、当日も受け付けます。どなたでも参加できる種目ですので、お気軽においでください。区長さんをはじめ正副組長さんもスタッフとして活躍していただきます。



感謝の会には、日頃お世話になっている皆様18名をご招待し、子どもたちが感謝の気持ちをお伝えしました。その後、放送健康委員会による給食集会“たくやくんの朝ごはん”の劇をとおして、朝ごはんの大切さについてみんなで考えました。そして、学校給食週間にちなんで、給食と一緒に食べながら、学校給食の歴史を振り返って、学校給食の意義や役割について話しました。

「生きる」をテーマに117クラスで授業

講師の橘田篤男先生は、上野原小学校の校長を最後に2005年に退職し、その後も県内外の小学校で特別授業を続けています。2月22日に本校の6年生を対象に国語科教材、詩「生きる」（谷川俊太郎作）の授業をしてくださいました。

70歳までに100学級で授業をしたいと思い立ち、1月25日に達成し、本校は117学級目だそうです。そして、次の目標として詩「生きる」の授業で100校達成を目指しています。温かい語り口に引き込まれ、2時間授業があっという間に終わってしまいました。



橘田先生へ

(拔粹)

☆ぼくは、「生きる」という詩を初めて読んだときは、意味がわからなかったけれど、橘田先生に教わったら、谷川俊太郎は何を伝えたいのかがわかりました。中部小の校歌も七五七五になっていることも知りました。「生きる」の詩を六年生を送る会で朗読します。橘田先生に教えていただいたことを生かして発表したいです。

☆橘田先生の授業を受けているうちに、四連が好きになりました。四連の最後の「いまいまが過ぎていくこと」というところを読んで次のように思いました。「いまというものは、過ぎてゆくものだ。その止めることのできない、いまの中でぼくたちは過ごしているんだな」と、はっきりしたものはないけれど、すごく感動しました。

☆「生きる」の詩を声に出して読んでみたとき、意味があまりわかりませんでした。二連目の「それはミニスカート」というところで、ミニスカートをファッションと考え、その中にも悪があるということを教えてくれました。それは、自分らしさを失うことです。七五七五のリズムがあることも知りました。今まであまり詩の意味を深く考えたことがなかったけれど今回の授業で「生きる」の詩の意味がわかりよかったです。先生がおもしろく優しく教えてくれたので、とても楽しい授業でした。百校目指してがんばってください。

本年度発行の文集「せおと54号」に次のような挨拶文を掲載しました。



長知沢分校



鬼島分校（第1校舎）



箱原分校（第2校舎）



鹿島分校（第3校舎）

上の写真は、せおと第1号が発刊される前年までの4つの分校の写真です。

昭和35年3月に発刊されたせおと第1号のあとがきに次のように記されていました。

昭和34年4月1日、記念すべき、わが鰺沢中部小学校創立の日だ。あれから月日がめぐり、早1年になります。全校186人が三つの校舎へ分散して、授業をしたのも、新校舎の建築が、槌音高く、力強く進んでいる現在、解消の日も近いでしょう。こんな時期に文集「せおと」が、明日の力を示すごとく力強く産声をあげました。創立の頃の姿をありのまま書き出したこの文集が、号を重ねていって何年後かの後に、わたしの、ぼくの心に何を語ってくれるのでしょうか。文集は新しいときだけでなく、古い文集になってこそ、初めて価値が出てきます。一度読むだけで、あとはホコリをかぶることがないように、大事にしてください。年が経るほどに味わって読めるものです。

編集者 深沢重夫 記

この年には、次のような特記事項がありました。

（台風7号）学校づくりの矢先、台風7号が本地方をもおそった。富士川は増水して鬼島付近は大洪水となる。鹿島の橋も流れる。長知沢の山道は崩れる。そして、再び分校に帰す問題も出る。だが、子どもの安全を守るために万全の策をとって統合新設校建設の努力を続ける。

（富士川の渡船）雨、今日もまた川止め、船はこせない。だが一時も学習はおろそかにできない。鹿島の子どもは第三校舎で自習。第三校舎に行く子どもたちは、第一に集まって学習する。6年生は職員室で教頭先生、5年生は会議室で伊藤先生、だが、机はない。みんな床に座って腰かけでやっている。この問題はこうしたらよいのだろうか。ここにもまた新しい悩みあり。



（再び台風来る）7号台風の爪痕も消えない9月26日、再び台風15号が本地域をおそった。至る所大被害があったが、特に箱原地区はひどく、殆ど全戸がやられてしまった。学校も第二校舎は屋根瓦が飛び、ガラス戸は壊れ、壁は落ち、その災害は大きかった。その上、校舎が傾いて危なくなり、やむなく教室を箱原の公会堂に移す。4年生は2階の部屋へ、2年生は下へとそれぞれPTAの奉仕で移動する。

（晴れの棟上げ式）2月17日、ついに中部小の新校舎建築なり。あふれる喜びの中、棟上げとなる。鰺沢中部地域の文化センターとしての中部小、統合新設校としてのモデル校、中部小の負うところの使命とその責任は重い。我が中部小の前途を心より祝福すると共に今日までを築いてきてくれた町の人々につきぬ感謝を込めて建設アルバム「第1号」を閉じよう。

そして、昭和35年7月15日に落成式が行われました。その後、現在の校舎は昭和60年3月2日に竣工式が行われ、今に到っています。

「せおと」を綴りながら、多くの地域の方々、保護者の方々、そして何よりも子どもたちの鰺沢中部小学校をつくろうという熱い思いを感じました。学校の沿革史からは、読み取れない多くのドラマの上に、今の本校があることを改めて知ることができました。と同時に、せおと1号に記されていた「鰺沢中部地域の文化センターとしての中部小、統合新設校としてのモデル校、中部小の負うところの使命とその責任」を、学校として果たすことができたのだろうかと自問しています。

さて、児童のみなさん、今年1年を振り返って心に残る出来事はどんなことでしたか。11人でがんばって取り組んできた一つ一つの行事、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうと取り組んできた児童会活動やクラブ活動、そして、「学び舎」としての大切な毎時間の授業等の思い出が「せおと54号」に記されることでしょう。

みなさんが心をつにして取り組んできた運動会について考えてみましょう。組立体操のフィナーレ「4段タワー」は、鰺沢中部小学校のめざす児童像「友達を信頼し合い、協力する子ども」を表現しているモニュメントととらえています。一番上で静止する2年生の大輝さんは、組立体操に挑戦するのは初めてでしたが、5・6年生に混じってがんばりましたね。足はぶるぶる震えてこわかったでしょうが、5・6年生を信頼し堂々と演技をしました。大輝さんを支える5、6年生10人は、重さに耐えながら歯を食いしばっていました。11人の成功させようという心意気に観衆は感動しました。11人で協力することのすばらしさを経験し、集団の一員としての自己の生き方について考える機会となったことでしょう。

運動会にしてもふれあい集会にしてもまた日々の教育活動においても、昭和34年当時の学校に寄せる地域や保護者の皆様の「4つの分校を統合して学校つくろう」という熱い思いが引き継がれ、今の本校が存在することを再認識しました。

そして、今年度も創立当時のみなさんの学校に寄せる熱い思いに支えられ、終わろうとしています。校歌にありますように、いつまでも明るい母校であり、楽しい母校であり続けられるように、全力で取り組んでいきたいと思います。

文集「せおと」はすべて校長室に保管されていますので、懐かしいあの頃を訪ねてみたい方は、どうぞお立ち寄りください。

平成25年2月20日

